

第3回 俳優と脚本家の勉強会

酒場のジゼル

作 たけだゆきと

登場人物

マリー（紺野彩瑛） 高梨彩子

中園啓次郎 鍋島星亜

ヨーク（案内のウェイリ／東陽子） 齊田貞子

ヨーコ、客席に礼。

ヨーコ（案内のウイリ）「ようこそそのお運び、御礼申し上げます。ここはスナック、ヴァリアシオン。恋に疲れた男と女が夜の帳（とぼり）にいつとき愛の虚像を映す幻灯機。今宵みなさまにお届けするはロマンティック・バレエ『ジゼル』。村娘ジゼルは都会的な空気をまとった村の男と恋仲。しかし、その男アルブレヒト。実は高貴な一家の御曹司だったので。純真なジゼルは信じていた恋人にウソをつかれていたショックで心を病み、命を落としてしまいます。死後、夜の妖精ウイリの一人となったジゼル。アルブレヒトを森で行われる死の舞踏へと誘（いざな）います。アルブレヒトに死を与えんとするウイリたちとジゼル。しかし」

中園、入ってくる。

中園「こんばんは」

ヨーコ「いらっしゃーい」

中園「あの」

ヨ一コ「マリ一。起きてマリ一。お客さん来たよ。マリ一。ごめんね。このママ。夜弱くってさ。マリ一」

中園「やっぱり」

ヨ一コ「え？」

中園「いえ。ママなのに夜弱いんですね」

ヨ一コ「そ。だから、お客が来たら私が起こして、マリ一。私はここで占いやってるヨ一コ。ほどよく当たる練馬の母。マリ一」

中園「ほどよく当たる」

ヨ一コ「占ってあげようか？」

中園「お気持ちだけで」

ヨ一コ「そう？　マリ一。マリ一」

マリ一、起きてくる。

ヨ一コ「おはよう、マリ一。お客」

マリ一「おはよう、ヨ一コ。いらっしや」

マリ一と中園、目を見合わせる。

ヨ一コ「占いはいらんだって」

マリ一「ヨ一コ。桃天」

ヨ一コ「え」

マリー「桃天。桃の天然水。買ってきて」

ヨーコ「マリー。今、令和」

マリー「桃天」

ヨーコ「いや。だから」

マリー「桃天」

ヨーコ「わかったわかった。わかったから」

ヨーコ、出ていく。

マリー「占い師なのに勘悪すぎでしょ」

中園「あもう」

マリー「（ソファを示して）どうぞ」

中園「ありがとう」

中園、座る。

マリー、中園の隣に座る。

マリー「水割りでいい？」

中園「ああ。うん。あ、いや自分で」

マリー「（酒を作りながら）どうしてここが？」

中園「人づてに。それに、お店の名前。ヴァ

リアション。ソロの踊りのことでしょ？

バレエの。だから」

マリー「いい靴。時計も」

中園「彩瑛（さえ）ちゃん。ごめん。黙ってて。でも僕は本当に彩瑛ちゃんが。彩瑛ちゃん
のバレエが」
マリ「役を金で買った。そう言われた」
中園「ごめん。本当にごめん。でも。でも僕は
は今でも彩瑛ちゃんのこと」
マリ「ここはスナック。ヴァリアシオン」
中園「え」
マリ「アルブレヒトはジゼルが生きていた
とき、本当に彼女を愛していたと思う？」
中園「もちろん」
マリ「そう」
マリ「と中園、目を見合わせる。
マリ「でもジゼルは死んだ」
中園「え」
ヨ「ヨ、入ってくる。
ヨ「ヨ」マリ。桃天なかった」
マリ「夜が明ける。森が出る時間よ」
中園「それは」
マリ「と中園、目を見合わせる。

中園「ごちそうさまでした。マリーさん」

中園、出ていく。

マリー、中園の背中を見送る。

ヨーコ、客席に向き直る。

ヨーコ（案内のウイリ）「死後、夜の妖精ウイリの一人となったジゼル。アルブレヒトを森で行われる死の舞踏へと誘（いざな）います。アルブレヒトに死を与えんとするウイリたちとジゼル。しかしジゼルの奥底に残っていた愛ゆえにアルブレヒトは死を免れる。朝となり夜の妖精であるウイリたちとジゼルは消え、アルブレヒトは森を出る。ここはスナック、ヴァリアシオン。恋に疲れた男と女が夜の帳（とばり）にいつとき愛の虚像を映す幻灯機。またのお越しをお待ちしております」

ヨーコ、客席に一礼して、去る。

マリー、踊りはじめる。

へおわり〜